吹田の63%が淀藩領だった
旧 中西家住宅探訪

新山ひろし

中西家住宅の庭と主屋。手入れの行き届いた美しい空間である

JR岸部駅から地下道を潜って北側に出た所に旧家の森が見える。それが岸部中4丁目にある「旧中西家住宅」である。別名は「吹田吉志部文人墨客迎賓館」で、江戸時代、大庄屋である中西家の邸宅だった。屋根に「むくり」という巧みな曲線を配した主屋。枯山水の趣向を取り入れた東の庭園。建物を取り囲む豊かな草花、そこには四季折々の表情が巧みに演出されており、日本建築の粋を感じさせる。創建は文政9年（1826）、今も江戸時代後期の建築時の姿をとどめている。旧中西家住宅のガイド、並田さんの話を聞きながら、知らず知らずのうちに、僕の心は江戸時代の吉志部（きしべ）の幽玄に遊んでいく。実に贅沢な時間である。しかし、「ここは、京都の淀藩領でした」という並田さんの言葉で、僕の心は、いささか鼓動を撃ち始める。「淀藩」？それは何だ！この「淀藩領」に対する疑問を館長の露口弘さんにぶつけてみた。それに対する露口さんのお話から、江戸時代の岸部のリアルなありようが浮かび上がってきた。今回は、旧中西家住宅から、江戸時代の淀藩領「吹田」へのタイムスリップの試みである。

吹田は、なぜ「淀藩」に支配されていたのか

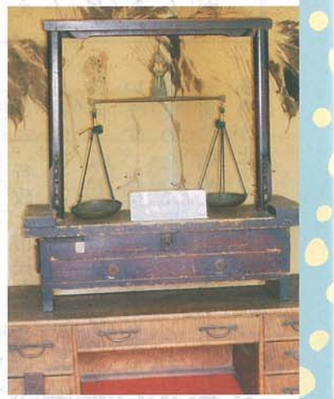
『吹田市史第2巻』によれば大阪夏の陣以降、「幕府が江戸に置かれたと言っても、大阪の重要性は変わらなかった。したがって大阪周辺は幕府の直轄領が多く、また旗本領とあわせて、幕府がこれを支配していた」とある。その吹田の幕府領を譜代「淀藩」が引き受けた。譜代とは、徳川家康方の系譜にある人や藩のことだが、家康地縁の遠江掛川より淀藩3万500石の譜代大名として松平定綱が淀城に入った。そして、同時に吹田の淀藩領の支配者となった。

吹田における淀藩の領土とは、山田の五ケ村、下新田村、佐井寺村、片山村、そして、吹田出作、吉志部郷五ケ村（全吉志部村・小路村・七尾村・南村・東村）の内の4ケ村。実に、現在の吹田の63%にあたる。中西家は、吉志部郷の東村にあり、江戸の中頃から明治維新まで、淀藩領における大庄屋の任務を務めた。

大庄屋「中西家」の仕事

中西家は近江の武家の出と伝えられる。大阪夏の陣の後、淀藩から土地を拝領し庄屋として定着した。煎茶道や芸術の素養に優れた中西家には、大塩平八郎、頼山陽など、多くの文化人も訪れたという。

「迎賓館」の露口弘館長は「吹田の地は支配が入り組んでいます。高槻藩領、淀藩領、天領、大名領と。これは、複数の支配を入り組ませることで、領主が強力になって謀反を起こすことを防いだのです」と語る。なるほど、幕府は大名の謀反にも目を光らせていたのである。それに、支配が複雑になると、百姓のまとまりも悪くなり、百姓一揆に対する歯止めにもなったという。


銀を計量するものである

ところで、中西家と農民の関係はどんな感じだったのだろうか。露口館長は「中西家は、大庄屋として農民にも、幕府方にも信頼も持たれていたようです。例えば、大塩の乱の時、吹田の泉殿神社とかは、かなりきつい罰を受けたのですが、中西家も村民も罪を免れています」と言う。中西家は、サロンとして多くの文化人を宿泊させてもいたし、恩義を感じる文化人が有利な口添えをしてくれたかも知れない。

淀藩も農民も貧しかった

さて、中西家と淀藩との関係で注目すべき事実がある。江戸末期、淀藩は大いに窮乏していた時のこと、淀藩主稲葉家が中西家に借金を申し込み、実際に中西家から銀が淀藩に貸与されている。中西家には、その銀を計量する天秤が残されている。当時の上方は銀本位制で、銀貨を入れる箱に「中八」の銘があるが、それは大庄屋「中西八兵衛」の略称である。その他、年貢米の重さを秤るハカリと重りなど、当時の年貢米を納めるための道具類が残されている。ここは農民たちの年貢米が持ち込まれた現場なのだ。

現在の「東の浜」跡。安威川右岸、ここより年貢米が積み出された

「中西八兵衛」の「中八」。その権勢が感じられる

その百姓たちの暮らしぶりはどうだったのだろう。「岸部の農民はものすごく貧しかったですね」と館長。豊かな百姓は少しで、村には小作人が多かった。そこに大飢饉、加えて、淀藩の財政の危機が重なり、重税となっていった。このような農村の危機を背景にして大塩平八郎の乱もありえたのだろう。

幻の「東の浜」を歩く

ところで、淀藩の役人は、この中西家に来ていたのだろうか。「何かあれば、一度や二度、来たかも知れませんが…普段は来なかったと思います」と露口館長。「ここで集めた年貢は、船に乗せて、近くの東の浜まで運んだのですよ」とガイドの並田さん。「東の浜」？それはどこにあったのだろう。

中西家を後にして、僕は「東の浜」に向かった。「東の浜」の場所については、昭和54年発行の『吹田市史』に掲載されている「わたしたちの町・岸部南かいわい」という記事が参考になった。JR岸部駅の横の「道明寺水路」という細い水路を南に歩き、およそ15分ほどで、安威川に出た。そこには、大きな水門があり「東の浜」の名残を感じさせる。ここから神崎川に出て、上流に向かい淀川に出て、淀藩のある京都方面に向かったのだ。「わたしの町」によれば、「東の浜に5軒、南の浜に3軒の船宿があった」らしい。

今は、何もない川べりに、一瞬、江戸時代の賑わいの記憶がよみがえった。

中西家に封じ込められた記憶

『わたしたちの町』には、昭和56年、当時79歳の安本栄治さんのインタビューが掲載されている。「天保生まれのおじいさんは、藩時代に比べたら、今は楽なもの。私らの頃は淀へ年貢を納めに行った時こそ接待もされたが、年貢を負けてくれるよう頼みに行った時はいつも待たされた」と安本さんは語っている。考えてみれば、「淀藩領」を選んだ村民は誰もいなかった。それは、ただ、幕府の統治システムであった。だから、その淀藩の支配が終わっても、その「支配」を懐かしむ人はいなかっただろう。それは「解放」だった。さて、明治4年7月、廃藩置県が実施される。淀藩が廃された。しかし、過去の入り組んだ行政区は岸部の町に長く、複雑な町のありようを示した。改めて、中西家の門前に佇めば、岸部の歴史が走馬灯のようにめぐるのである。

■協　力■
●旧中西家住宅（吹田市文人墨客迎賓館）吹田市岸部中4丁目13番21号／電話06・6386・1182
観覧希望者は、電話予約が必要。12月29日～1月3日を除く水曜日・土曜日・日曜日のそれぞれ午前10時・午後1時・午後3時で各時間帯定員30人。

■参考文献■
●「中西家住宅の建築」　平成20年　吹田市立博物館発行
●吹田市報「わたしの町」岸部南かいわい
●吹田市史／第二巻　第二節　幕藩体制の確立／第三節　幕末の領主財政

※淀藩…江戸時代の初め、秀吉が築城した伏見城を廃し、その廃材を利用して、淀城を築城。そこで、松平定綱は淀藩主となる。同時に、吹田の淀藩領の領主を兼ねた。以後、領主の交代が激しく、1723年稲葉正知が入って以来、幕末まで稲葉家が続いた。

※淀藩・稲葉氏…稲葉氏は、元豊後臼杵の出身。正成の時、その妻、春日局が徳川家光を養育。その縁で、嫡子・正勝は老中を務めた。幕末、鳥羽伏見の戦いが起こると、敗走する幕府軍の入場を拒否し、中立的立場をとったが、明治4年廃藩。淀県を経て京都府に編入した。